

千葉醫學會雜誌 第二部

第十六卷 第二號

昭和十三年二月

綜 說

【昭和十三年一月二十九日受附】

パパヤ (*Carica papaya* L) の多食に因する柑皮症の1例

南洋廳サイパン醫院
南洋廳醫官 岡 谷 昇

1. 緒 言

1896年ヘルツは密柑の多食に因する皮膚黄染を發表し始めて邦人の注目を惹きたり。其の後北海道に於て石川、岡田の諸氏は南瓜の嗜食によりても同様の症狀發生すと報告せり。著者は渡南後十數年を我が南洋群島に暮したれど未だパパヤの嗜食によりて起りたる皮膚染色を経験せざりき。土著民の故老に就きて訊ねたれど未だかゝる例を知らずと答へたり。最近サイパン醫院内科の外來患者中に興味ある本例を發見せし故、南洋に於ける初發例として茲に報告せんとす。

2. 症 例

患 者 村上長子 女 17歳

初 診 昭和12年11月29日

主 訴 四肢の冷感及び心悸昂進

既往症 8歳の時父母と共に渡南せり。9歳の時癩疹を患ひたる外、アメーバ赤痢、デング熱等の熱帶病にも侵されず今日に及びたりといふ。

現病病歴 9月の終り頃前記の病狀にて某醫院の診療を受けたる所脚氣の病名にてパパヤの食用を奨められたり。依つて患者は力めてパパヤを攝取し、10月中は毎日小兒頭大のもの2箇づ、連用せるに、11月初旬より兩手掌及び兩足趾に皮膚の黄染を認むるに至れり。

現 症 体温 36.4°C, 脈搏 80, 体格榮養共に中等度, 外表何處にも損傷浮腫等を認めず。

胸部は聴診及び打診共に著變なし。腹部に抵抗又は腫大を認めず。膝蓋腱反射は正常にしてシビレの如き異常感を證明せず。検便によりて何等虫卵を認めず。検尿により蛋白、インヂカン、デアツオ、膽汁色素共に陰性なり。

皮膚染色の部位 手は左右共手掌に於て黄色著明なり。手形を印する時に墨付の善き部位に黄色強し。換言すれば物を握る際に接觸の多き所且つ亦皮膚の稍々厚き所に濃染せり。指間の軟かき皮膚の所は黄色の度薄し。手掌に指壓を加ふれば該部は著明に黄色となる。手背の黄色の度手掌より軽度なり。手腕關節より上部は黄染薄くして殆ど認め難き程度なり。足も左右共に手掌と同程度の黄色にして床につく處に著明なる黄色を呈す。即ち「土踏まず」の所は黄色軽度にして表皮の厚き所程濃く黄染するを認め、而して指壓によりて益々著明の黄色を呈する事手掌に於けるが如し。足背の著色は手背同様屈側に比して染色薄し。軀幹及び顔面の皮膚着色は著明ならず。黄色を殆ど認めざる程度なり。眼球結膜の着色なし。發汗によりて白き肌着の黄染する事もなし。手足の黄染は左右對稱にして該部に疼痛又は搔痒を感じず。

經過 患者の主訴なる四肢の冷感及び心悸昂進は神經衰弱の症狀にして、プロムカリの投藥により次第に輕快せり。

12月8日 手掌及び足蹠の黄色尙著。

12月17日 尙褪色せざるも軽度となり、指壓により皮膚の肥厚せし部のみ黄色稍々明かとなる。

12月30日 着色頗る軽度なり。

1月8日 殆ど褪色せり。

3. ババヤの色素

ババヤは熱帯アメリカの原産なれど南洋群島の各島に發見さるゝ果樹にして生成迅速、僅か1年にして結果す。雌雄2株ありて雄株には實らず。樹幹は大概分枝せず3-4mの直立棒状にして梢頭に長橢圓形の長さ20-30cmの果實を結ぶ。熟すれば黄色となり厚き果肉は特有の香を有するも、水分に富み甘味強くババインを含有す。ババヤに存する黄色色素は刈米博士に依れば Kryptoxanthin ($C_{40}H_{56}O$) なる Carotinoid なりと。

4. 結 論

1. 著者はサイバン島に於てババヤの多食に因する柑皮症を経験せり。
2. 皮膚の黄染は對稱性にして何等の疼痛搔痒を起さざりしも褪色に2ヶ月余を要したり。手掌足蹠の表皮肥厚せる部位に殊に著明なる着色を認めたり。

擧筆するに臨み、御校閱を賜はりたる佐々教授に深甚の謝意を表す。